



TITLE:

ツツバ語の動詞(下位分類)

AUTHOR(S):

内藤, 真帆

CITATION:

内藤, 真帆. ツツバ語の動詞(下位分類). Dynamis: ことばと文化 2005, 9: 103-111

ISSUE DATE:

2005-10-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87719>

RIGHT:

[研究会報告 2]

ツツバ語の動詞 (下位分類)¹

内藤 真帆

1. ツツバ語の節構造

Periphery	Core	Nucleus	Core	Periphery
Adjunct	Subject	Predicate	Object	Adjunct

* . . . 一部省略

動詞は動詞句の主要部である。

自然現象に関する動詞と存在動詞の否定形をのぞく全ての動詞は固有名詞や普通名詞、そして独立代名詞を主語位置にとることができる。

自動詞は主語を必要とし、他動詞は主語と補語の二つの項を必要とする。

他動詞の補語の位置にあらわれることの出来る語を目的語とする。この位置に生起できるのは名詞句、代名詞、目的語代名詞接語である。

動詞には主語の人称・数に一致する主格の代名詞接語が義務的に付加する。

主語代名詞接語と動詞の間には相・法などの接語が生起することができる。

これまでの調査データからは、派生辞が付加するなどといった形態的变化を伴わず、自動詞としても他動詞としても用いることの出来る自他両用の動詞は見つかっていない。

1.1. 非人称動詞 (Impersonal verb)

自然界の現象をあらわす動詞は非人称動詞であることが多い。これらの動詞は主語に名詞句や独立代名詞をとることができず、代わりに形式主語 (dummy subject) をとる。この動詞に先立つ代名詞接語はつねに三人称単数である。

¹2004 年 6 月 11 日発表。

Times of the day:	mo sura	it became sunset
	mo dondo	it became night
Tide:	mo ua	the tide is up
	ma malo	the tide is down
Whether:	mo usa	it rained
	ma alo	it was sunny
	ma mariri	it was cold
	ma lualu	it was hot
	me mi	there was earthquake

これらのうち、潮の満ち干きと降雨に関する語は非現実法の主語代名詞接語と共起することが出来るが、それ以外の語は現実法としか共起しない。法の変化にかかわらず、主語代名詞接語は三人称単数のままである。(e.g. mo-usa → a usa ‘It will rain’)

1.2. 自動詞の下位分類

これまでに収集した動詞は全て、非現実・現実法との共起が可能であった。しかし、命令法の接語とは共起可能なものとそうでないものがあり、ふるまいの違いがあることが分かった。また、多くは進行相の接語と共起可能であるが共起可能でない動詞もわずかながら存在した。

進行相と共起すると継続的意味になる

sale	‘float’	firfiri	‘be poisoned’	ndum	‘sink’
ulua	‘sprout, grow’	aira	‘wet’	masa	‘dry’ (省略)

進行相のマーカと共起可能、ただし継続的意味として

araf	‘blind’	mandua	‘skinny’	nini	‘fat’
lofnga	‘angry’	andiandi	‘itchy’	falafuroi	‘naked’

原則として進行相と共起不可能

mbilo	‘bold’	tiana	‘pregnant’	inose	‘old’
-------	--------	-------	------------	-------	-------

命令法・進行相の接語と共起可能

Falao ‘run’ masorungai ‘pray’ loso ‘bathe’ (省略)

1.2.1. 拡張された自動詞 (Extended intransitive verbs)

1.2.1.1. 補語の位置に主格をとる自動詞

ntau ‘afraid’

lofnga ‘angry’

S V X (X = nominative)

‘afraid’

(9) ma ntau
3SG.R afraid
‘He was afraid.’

(10) ma ntau nao
3SG.R afraid I
‘He was afraid of me.’

1.2.1.2. 補語位置に斜格をとる自動詞

補語の位置に斜格を必要とする自動詞がある。(要確認)

retireti ~ rtireti ‘talk’
(13) nno retireti telei a
1SG.R talk pp O:3SG
‘I talked to him.’

1.2.1.3. Posture verb

ate ‘to sit’

eno ‘to lie’

1.3. 他動詞の下位分類 (Subclasses of transitive verbs)

1.3.1. 再帰動詞 (Reflexive verb)

再起動詞は 主語の人称・数に一致した対格補語を必要とする。ただし身体部位が主語であるばあいはその身体を所有する者の人称・数 に一致した対格補語をとる。このような動詞には ‘hungry’, ‘tired’, ‘sore’ があり、ともに状態を記述した述語 (state-describing) である。これらは必ずしも動作主の積極的な働きかけにより引き起こされ

るものではない。

ngmarumati/ marumati ~ maromati 'hungry'

ngmolum/ molum/ lum 'tire'

'hungry'

- (15) Eileen ma maromati a? (16) Io, mo ngmaromati a
 E 3SG.R hungry O:3SG Yes, 3SG.R hungry O:3SG
 'Is Eileen hungry?' 'Yes, she is hungry.'

ツツバ語では、主語が三人称単数の場合を除き、進行相の接語 'lo' が主語代名詞接語と動詞の間に挿入されうる。再起動詞文においても同様で、進行相の接語が状態をあらわす動詞に後接すると「まだ～である」、「ずっと～である」のように状態の継続があらわされる。

- (18) nno lo marumati ao
 1SG.R Prog hungry O:1SG
 'I am still hungry.'

主語位置に身体部位があらわれる述語 'sore' は補語を必要とする。この動詞は身体部位を主語にとり、補語の位置には身体所有者の人称・数に呼応した対格代名詞接語をとる。このとき主語と補語の位置にあらわれる人称は一致せず、主語の人称は必然的に三人称単数か三人称の複数となる。

主語の人称が三人称単数

主語の人称が三人称複数

- (19) karu-ku ma asi a (20) karukaru-ku ra asi ao
 leg-my 3SG.R sore O:3SG legs-my 3PL.R sore O:1SG
 'My leg was sore.' 'Both of my legs were sore.'

1.3.2. 拡張された他動詞 (Extended transitive)

1.3.2.1. 主格補語をとる他動詞

補語の位置に目的格ではなく主格をとる、二つの項の両方が主格となるような他動詞がこれまでに一つ見つかっている。ただし多くの場合において主語は省略され、人称・数が主語に一致した代名詞接語が動詞の前にあらわれるため、表面上主語はひとつだけであるように見える。

tuan ‘help/ support’

- (21) (nna) mo tuan nao
 He 3SG.R help O:1SG
 ‘He helped me.’

1.3.2.2. 補語位置に斜格をとる自動詞

代名詞の中には直接目的語と斜格目的語の両方を必要とする動詞がある。(要確認)

tima ‘give someone something’

- (23) E lafi a lafe ao
 Impe.2SG. give O:3SG pp O:1SG
 ‘Give it to me!’

(lafi=tima=give ただし lafi は目的語に一人称単数をとることが出来るのに対し、tima は出来ない)

1.4. その他の動詞 (Unusual verbs)

1.4.1. 存在動詞 (The existential verbs)

存在を表す動詞には肯定形と否定形の二つがある。ここに挙げる存在動詞以外の動詞は否定の後接語 ‘te’ と共起しうるが、存在動詞には否定形があることから否定の接語は不要である。つまり、存在動詞は否定の接語とは共起することができない。

肯定 rei ‘exist’ 否定 tete ‘nonexist’

方向を表す移動動詞 (Directional motion verbs)

単独で用いられるもの

fano ‘go up toward the South West direction (inland)’

sifo ‘go down toward the North East direction’

sae ‘go up direction (from coast to village/ garden)’

他の語句とともに用いられるもの

fa ‘go up toward the SW direction, go(general)’ fa + 場所方向を表す副詞

si ‘go down toward the NE direction’ si + 場所・方向をあらわす副詞

sa 'go NW direction/ go toward the garden' sa + 場所・方向をあらわす副詞

移動動詞と義務的に共起する語

ra 'go up toward the South West direction (inland)

si atano go on the ground

alao go down to the coast

tisin go down to the North East direction

sa auta go inside direction

Olotu go to Santo islands

質疑応答（敬称略）

伊藤（コメンテータ）：拡張された動詞の中で目的語の位置に主格をとるものがあるが、例を見る限りでは与格の意味のときに主格形を用いているように思える。その点についてはどう考えているか。

内藤：ツツバ語では与格は前置詞＋目的語代名詞という形で表現されることが多く、これを与格とは考えなかった。Help については英語がそうであることから他動詞であると考え、与格の表現をここに当てはめてそれが非文となるか調べなかったが、今後その点も調査していきたい。

伊藤：英語であれば与格も対格も同じ目的格という形で表され、help の後の目的語位置にはその形を用い、辞書でも help は他動詞として扱われているのだが、ドイツ語の場合は help にあたる動詞の後の目的語位置には与格を用い、自動詞に分類されている。存在動詞について、英語には存在文を用いてその存在を言及されるものは不定でなければならないという規則がある。ここでは固有名詞でも存在動詞を用いた文の主語になれるとあるが、ツツバ語には英語のような定性に関する制約のようなものはないのだろうか。例えばこの動詞を用いて、「内藤さんはどこそこにいる」というような表現は可能であるのか。

内藤：定性に関する制約について、現段階で答えることは出来ない。また固有名詞の中でも人名が主語になり存在が表される場合はまた別の動詞が用いられる。生物・無生物といった区別がこの動詞の使用に関係している可能性もあると考えている。固有名詞以外のものが現れるかどうかという点については、また例文を作って今後調査したい。

伊藤：そもそも、ツツバ語では名詞句に定・不定の形態上の区別はあるのか。

内藤：これまでの調査から形態上の定・不定の区別はあると考えているが、そのそれぞれの意味がどう違っているのかは判然としていない。

李：非人称表現において、dummy subject がかなり義務的に置かれるということであるが、これは発生的にツツバ語本来の特徴であるのか、それとも周辺言語と共通した特徴であるのか、また外来言語の影響を受けたものであるのか。

内藤：オセアニアの言語の多くはこのような特徴を有していると考えられる。

李：方角の表現について、基本的に傾斜が関与している、つまり上昇・下降により区別

していると考えているのか。例えば、族長の家に行くといった場合はどうなるのか。

内藤：その家が今自分のいる位置からどの方向にあるのかによって異なる。

李：それならばやはり傾斜が関係していると言ってよいかもしれない。

内藤：自分が歩いていると傾斜があるようには思えないのだが、現地では go up、go down という表現をするので、昔は大きな傾斜があった可能性もあると考えている。

李：傾斜のない平坦な場所の場合は、neutral な表現が別にあるのか。

内藤：そういったものはなく、必ずこのどちらかで使い分けている。go up、go down という表現が土地の傾斜によるものと考えているが、太陽に関係があるという可能性もある。例えば太陽が昇る方向が上、などのような概念があるのかもしれない。

伊藤：太陽が昇る方向が上だとすれば西が上というのは矛盾するのではないか。

李：中国の少数民族で、強制的に移住させられた後に東西の表現が逆になった例がある。ツツバでもそのようなことが起こった可能性はないだろうか。民族の移動によって自らの位置づけが微妙に変化することがある。移動が大きくて方向がわからなくなり、自分の位置を取り違えてしまった結果、逆になったということも考えられる。

三谷：言葉としての形式と、実際の地理上の方向感覚にずれが生じたということも考えうるだろう。

内藤：ツツバ島ではどうかかわからないが、宣教師が来た際に島の反対側にあった村が強制的に位置を変えさせられ、移動を余儀なくされたという話を聞いたことがある。

李：東アジアでは、東や北に行くのが上昇、西や南は下降という概念がある。それにも関係しているかもしれない。個人的な感想としては、方向感覚と移動、そして太陽には何か関係があると思う。come が変化を表す語として用いられているようだが、go にあたる fa に関して、対になるような表現はないのだろうか。例えば状態の変化でなく、消失や遠ざかりを表したりすることはないか。片方だけが先に発達する例もあるが、自分の知っている言語で考えると対になる表現があっても不思議でないと思う。

三谷：非人称動詞は自動詞と別の分類として立てるのではなく、自動詞の下位区分としても問題はないのではないか。形式主語をとるということからも、自動詞の中で非人称的なものとしてもよいと思う。本発表のように自動詞と区別してもよいのだが、可能性として考えてみてほしい。進行相の接語と共に起して継続的意味にならないというのは、どういうことであるのか。

内藤：進行相は単に進行の意味を表す。継続の意味とは例えば「まだ太った状態である」や「ずっと太っている」のような状態動詞が継続的用法で用いられているものをこのように分類した。すべての動詞について、進行相や命令と共起できるかを調べているのだが、インフォーマントが必ず『まだ～している』という意味だ」と強調することから、何か特別な意味があるのかもしれないと考えている。

三谷：単なる進行とは異なり、例えば最終的に行き着くところがある、などの意味を表している可能性もある。また、先ほどの help などの点に関して、angry や afraid を他動詞と考えることはできないのだろうか。

内藤：その可能性も考えたが、例文 9 や 11 のように完全な自動詞として使うこともできるので自動詞に分類し、help に関してはそれができなかったのがこのように分類した。

伊藤：では、angry や afraid を自動詞でも他動詞でも使える動詞として分類することはできないのだろうか。そのような動詞はないとの指摘が発表中にもあったが、これらをそこにあてはめることも考えられる。

三谷：目的語を言わないことによって自動詞的にも使えるものとして扱い、主格的補語を取るものとしてタイプ分けすることも可能だろう。英語の自他をあまり当てはめずに考えたほうがよい。これは、どの人称が来ても主格補語になるのか。

内藤：調査した中ではすべてそうになっていた。

三谷：存在動詞について、グロスでは There are oranges. になっているが、ツツバ語の形は 3 人称単数を用いるのか。

内藤：存在表現では、義務的に 3 人称単数の形を用いる。